

小さな町の働き方改革と 中学校部活動の地域移行

地域の
特色ある
活動

滋賀県豊郷町教育委員会

1 はじめに

豊郷（トヨサト）町は、滋賀県の湖東地方に位置し、面積約8㎢で県下19市町の中で一番面積が小さく、人口約7,100人の町です。町は、中山道、近江鉄道、国道8号線といった交通環境の整った町でもあります。学校は、2小学校、1中学校で、一部の地域では宅地開発が進められていますが、小学校では単学級化になりつつあります。町長は、このような街を程よい田舎という表現をされています。また、伊藤忠・丸紅の創業者を輩出したところでもあり、今でも学校・地域が一带となって関係会社と交流を図っています。

中山道沿いにあるヴォーリズが設計された豊郷小学校旧校舎群は、アニメの舞台としても取り上げられ、毎日多くの方が見学に来られています。



前：旧校舎 後：新校舎

2 本町の教育行政関係

県下でいち早く、小・中学校の給食費の無償化や高校生世代までの医療費の無償化に取り組むとともに昨年度からは、小・中学校の

修学旅行の補助金も大幅に増額し、子育て世代の経済的支援を行っています。

町教育行政方針では、「豊郷に誇りをもち一人ひとりが夢を抱き心豊かに向上し文化の香り漂う豊郷をめざします」とし、今年度が最終年になります。特徴的な取り組みとしては、小学校5年生、中学校2年生を対象に、アスリートによる夢先生事業を実施し、夢を持つことの素晴らしさを教えてもらっています。また、教職員には、毎年2名の先生対象に1週間の県外研修を行い、次年度に町内教職員全員研修会で報告いただいています。

今年度の主要な取り組みとして、昨年度より重点的に組んできた働き方改革と中学校の部活動の地域移行について、述べさせていただきます。

3 働き方改革

教員の働き方改革では、今までいろいろな取り組みがされてきましたが、長続きしなかったり、教員に実感が伴わなかったりしたように感じられます。そのような中で、「月の第1、第3水曜日の午後1時の完全下校」に取り組むこととしました。この完全下校というのがキーワードです。完全という言葉を外すとしてもだらだらと区切りがつかなくなる場合が多いように思います。思い切って学校の教育活動と切り離すことを意識化するようにしました。また、学校単独での実施は難しいため、町内3校が一斉に取り組むこ

とし、定例教育委員会議での承認後、3校のPTA会長にも説明し快諾をいただきました。その後、各校の保護者には、この取り組み内容を文書で配布し、町広報紙でも理解・協力をいただくようにしました。また、下校後の子供の居場所については、放課後児童クラブ、図書館、地域総合センター等の施設責任者の合同会議を開催し、小さな町だからこそできる地域ぐるみの子供の見守り形成を図っています。最終的には、この取り組みで、教師も子供も時間をどのように過ごすのが有効的なのか考えるきっかけになればと思います。そして、半年後には、この取り組みの振り返りも行い、より実効性のあるものにしていきたいと考えています。

4 中学校の部活動の地域移行

本町では、昨年度6月より「部活動地域移行支援コーディネーター」を配置して、児童生徒及びその保護者と教職員にアンケート調査を実施しました。そして「部活動のあり方検討会」でその課題を整理し、段階的な地域移行体制の構築に向け、様々な関係者の方々の理解と協力を得ながら、改革を推進していくこととしました。その中で令和7年度までにまず、①「休日の部活動を段階的に地域移行していくこと」と、②「生徒のニーズに合った多様な運動機会の充実」を目標に取り組むという方向性を決定し、令和6年度からはサッカーと剣道を地域指導者で、町内の総合型地域スポーツクラブで多種目の指導者を確保することができ、小さな町ならではの「豊郷モデル事業」をスタートさせました。



部活動のあり方検討会



サッカークラブ



剣道クラブ



スポーツスクールクラブ

また、「豊郷町サポーターバンク」に応募されたバレーボールの指導者がおられ、中学校と協議してモデル事業を6月から追加することになっています。

顧問は異動が想定されますが、休日だけでも変わらぬ地域指導者に指導してもらえることは生徒にとってメリットになると考えています。現在、課題と考えていた顧問と地域指導者との連携、生徒・保護者と指導者の信頼関係、事業予算の確保などはある程度スムーズに進んでいますが、今後はモデル事業の成果を見極めて拡大を図りたいと考えています。

5 おわりに

近年の教職希望者の人数が少なくなっていること、また、採用後の離職者が多いのが気になるところです。子供に夢を持たせることのできる職種はそうありませんが、今の若い人にはなかなか受け入れてもらえそうにはありません。夢と希望を持って教職に就いたにもかかわらず、自分の描いていた理想とあまりにもかけ離れている現実とのギャップに失望するのも分からなくはありませんが、教師という職がもっと魅力的であるにはどうすればいいのか、教育関係者は過去の規制等にとらわれることなく考えなくてはならないと感じる毎日です。



教育長
堤 清司